

重要視されるべきもの

一戸高等学校 三年 川原 未久

手書きの文字を見て、誰が書いたかわかるという人は知り合いの中でも限られている。ノートを貸し借りする友人、板書する先生などだ。私たち高校生世代にとって、文字を書くのはほとんどが学習のためである。友人とのやりとりはほぼSNSの中になり、文字を書く機会は失われている。社会人になればさらに文字を書く機会は減っていくだろう。

手紙を書く機会をはかる目安として年賀状の発行枚数を見ると、二〇〇三年は約四十五億枚であった発行枚数が、二〇二一年は約二十億枚と著しく減少している。理由はSNSの普及や、新型コロナウイルスの感染拡大による企業の広告費の削減など様々あるが、私たちは手紙を書く機会を失いつつあると言えるだろう。

だからなのか、私はもらった手紙を決して捨てることが出来ない。印象に残っているのは父の手紙だ。中学の卒業の時に両親から手紙をもらった。父からの手紙を読んで、「お父さんはこういう文字を書くのか」と初めて気がついた。母の文字は学校への提出書類などで何度も見えて知っていたが、父の文字はそのときまで見たことがなかった。父らしく優しく、丁寧な文字で、私が生まれてきたときのことや、「生まれてきてくれてありがとう」という感謝の言葉が、便箋の中間に綴られていた。

普段から優しい父ではあったが、忙しく、十分な会話の時間がとれないこともあったため、私は父の思いにそれまで気がついていなかった。また父が時間を割いて一字一字私のために文字を綴ってくれたことが嬉しく、父からの手紙は私にとって大切なお守りとなった。

その後、父の日と母の日に私はメッセージカードを贈った。直接は言えなかった感謝の思いを綴ったその文章は、今から思えば子どもっぽく、センチメンタルなものであった。両親はその手紙を受け取り、一度読んで「ありがとう」とは言ってくれたが、すぐにどこかに仕舞ってしまった。「せっかく書いたのにもう読まないのだろうか」「どう思っただろうか」と気になっていた。しかし、数日後、両親の部屋に入ったとき、私の手紙が飾られているのを見つけたときの喜びは、筆舌に尽くしがたい。

手紙とは、毎日顔を合わせている家族でさえ、いや毎日顔を合わせる家族だからこそ、伝えられない思いを伝える力を持っている。それが手書きで一字一字書かれたものであれば尚更、書く側は相手のことを改めて深く考え、受け取った側は文字から相手の個性を感じ、その人を身近に感じる。その文章から自分のために使われた時間を感じ、相手の思いを感じ取ることが出来る。

相手への気持ちを伝える手紙は、現代だからこそ重要視されるべきだと私は考える。